

## 5 日本語教育のための文法体系

### (1) 日本語教育の文法

私たちが学校教育で受けてきた「国語」で扱う文法は**学校文法**と呼ばれ、すでに日本語の運用能力がある日本語母語話者を対象に、日常的に使用している日本語の仕組みや成り立ちを分析することを主な目的としています。一方、日本語学習者は、日本語の運用能力を身に付けるために必要な知識を学ぶことになるので、日本語母語話者を対象とした学校文法の教え方では通用しないことがほとんどです。そのため、日本語母語話者として運用している日本語を、日本語教育の文法（**日本語教育文法**）に整理し直していく必要があるのです。

⇨13 章「言語の構造一般」(日本語教育文法)

### (2) 品詞

語を、もっている意味や形、働きによって分けたものを**品詞**といいます。学校文法では品詞を次のように分類します。

語	自立語	活用がある	述語になる（用言）		動詞
					形容詞
					形容動詞
	自立語	活用がない	主語になる（体言）		名詞
					副詞
			修飾語になる	連用修飾語	連体詞
				連体修飾語	
			接続語になる		接続詞
			独立語になる		感動詞 (感嘆詞)
	付属語	活用がある	助動詞		助動詞
		活用がない	助詞		助詞

この中で、日本語教育で扱うのは主に動詞、形容詞（イ形容詞、ナ形容詞）、名詞、副詞、接続詞、助詞、助動詞ですが、その中でも品詞名を扱うのは主に動詞、形容詞（イ形容詞、ナ形容詞）、名詞くらいです。助詞や助動詞はもちろん学習項目には入っていますが、文型の一部として働くため、品詞に着目せず一つの形式として教えられます。例えば「～にもかかわらず」は、品詞分解してみると「～に（助）も（助）かかわら（動）ず（助動）」ですが、学習者にはそれぞれの品詞の意味を説明し、それを結合するとどんな意味になるかを教え

るのではなく、「～にもかかわらず」という一つの形式として、これ全体で逆接の意味をもつというアプローチをします。

**Memo▶** 初級では動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞を品詞名として伝えるが、中上級では副詞、接続詞、助詞などの品詞名も必要に応じて伝える。

(3) 動詞

ア 動詞活用の種類

学校文法では、活用の仕方によって動詞を次のように5種類に分けます。

			未然	連用	終止	連体	仮定	命令
		接続 語幹	ない (よ)う	ます て	。	とき ので	ば	！
五段活用	例： 書く	か	か こ	き	く	く	け	け
上一段活用	例： 起きる	お	き	き	きる	きる	きれ	きろ
下一段活用	例： 答える	こた	え	え	える	える	えれ	えろ
力行変格活用	来る		こ	き	くる	くる	くれ	こい
サ行変格活用	する		し	し	する	する	すれ	しろ せよ

日本語教育文法では次の三つに分類されます。

日本語教育文法	学校文法
1 グループ動詞 (1 型動詞、U-verb、子音語幹動詞)	五段活用動詞
2 グループ動詞 (2 型動詞、RU-verb、母音語幹動詞)	上一段活用動詞、下一段活用動詞
3 グループ動詞 (不規則変化動詞、irregular-verb)	力行変格活用動詞、サ行変格活用動詞

ある動詞が何グループに属するかは、「～ない」の形を作り、「ない」の前に来る音で判断できます。3 グループ動詞は「する」と「来る」の二つだけなのでこれは省き、1 グループ動詞の場合、「書かない」「飲まない」のように「～Aない」になります。2 グループの場合、「起きない」「見（み）ない」